あるから

人・暮らし 発見誌
【飯能・名栗周辺】
arukara
September 2005 Vol.1

特集 南高麗 間野黒指

暮・想（くらそう）

飯能探訪
みいつけた！
詩人・打木村治

連載：暮想（くらそう）

都心にも出られ、自然とも遊べる。僕たちには、ちょうどいい環境。

僕たちが飯能にやって来たのは、まったくの偶然。それまでは所沢に住んでいたのですが、結婚を機に「ペット可」の借家への転居を迫られました。そこで、趣味のサイクリングがてら青梅の周辺に何か良い物件はないかと出かけたのですが、結局は空振り。同じ道を通って帰るのも面白くないと思い、飯能を通って帰ることにしたら、たまたま今の家と出会ったのです。

岩渕ですから、駅まで歩くと30分程度はかかります。所沢に住んでいたころに較べ、都内へ出るのに1時間ほど余計にかかるようになりました。しかしそれ以上のものが、ここにはあるんです。

あるときは、庭にティピー（インディアン式テント）を張って焚き火を楽しみ、あるときは燻製箱でベーコンを燻し、またあるときは、七輪と鉄鍋を庭に持ち出し、パンやピザを焼き、それらを肴にガーデンパーティも楽しんでいます。そうそう、庭に勝手に生えてくるニラを使ったギョウザは絶品です。

裏山ではウグイスやシジュウカラが鳴き、夜にはアオバズクもやって来ます。これだけの環境があるのですから、少しぐらい不便でも、許容すべきだと思っています。いや、「不便」と言っても「都心に出るのに、以前より時間がかかる」というだけで、日常生活はぜんぜん不便ではないんですけどね。

あとは、もう少し川がきれいだといいですね。近所の人に聞くと、「30年ぐらい前は、みんな成木川で泳いでいた」と言いますが、今は深みは青白くよどみ、魚も鯉かウグイぐらいしかいないようです。ヤマメがたくさん泳いでいても不思議ではない雰囲気があるのに、もったいないですね。

そんな環境が取り戻せたら、都内（に限らず市街地に）住む友人から、今以上にうらやましがられることでしょう。

いいとこですよ、飯能って。

飯能市岩渕在住のモータージャーナリスト。出身は狭山市。「ビーパル」（小学館）など、車やアウトドア関係の雑誌で活躍中。趣味のMTBでは、南米アンデス山脈走破の経験あり。
妻・子ども・犬との3人＆1匹暮らし。

●編集後記● いいこと、あるかも

はじめまして、「あるから」です。

「あるから」は、飯能・名栗周辺の各地域の暮らしや歴史を紹介する情報誌で、市内で広告立案やデザイン・印刷の仕事をしている者が発行しています。創刊号で取り上げたのは、南高麗・間野黒指。誇り高く、山里で暮らしている方々との出会いは楽しいものでした。突然の依頼にもかかわらず、取材に協力いただき、本当にありがとうございました。また、まちづくり推進委員会・南高麗、南高麗小学校の先生方に親切にしていただきましたことをお礼申し上げます。

次号の取材先は未定ですが、お願いに上がった際は、ぜひいろんなお話をお聞かせください。内容も未熟で発行体制も整っていませんが、マイペースながら発行していきますので、どうぞ温かく見守ってやってください。

スポンサー募集

ようやく発刊にこぎつけた「あるから」ですが、記事内容も、ページ数も、もっと充実させたいという思いは常にあります。知れば知るほど、興味深い飯能。資金面で協力していただけるスポンサーを求めています。

●当誌に関するご意見・ご感想をお寄せいただけるとうれしい限りです。電話、ファックス、Eメール等でご一報ください。

考房 あるから
357-0035
埼玉県飯能市柳町6・7・302
Ⓣ 042・971・3746
Ⓕ 042・974・0069
Ⓜ arukara@san-s.jp

制作 ●ディレクター 増田 伸一 *Shinichi Masuda* ●取材・執筆 石井 茂 *Shigeru Ishii* ●グラフィックデザイン 黒田 靖 *Yasushi Kuroda*

飯能探訪 みぃつけた！

飯能を終の棲家とした作家・打木村治。彼はどんな思いで、わが町に暮らしたのか？

この話が舞い込んできたのは、予定の取材を終え、原稿・写真・体裁が大方整い、いよいよ発行に向けて動き出そうという時でした。話とは、飯能で暮らしたある作家の生誕１００年を記念し、飯能在住時に書き上げた小説「天の園」を原作とするアニメ映画「雲の学校」の上映が決まったこと。私たちは、タイムリーでおもしろそうな話題に、つい飛びついてしまいました。

作家の名は打木村治。ここ飯能でも彼を知る人は、それほど多くはないようです。17年前、有志の尽力により子ノ権現（飯能市南４６１）に文学碑が建てられたものの、その後人々の記憶に残ることはありませんでした。にもかかわらず、この度、上映会が開かれるに至ったのは、文学碑建碑委員でもあった森和夫さんの働きかけによるところが大きいと聞いています。

当誌でこの話題を取り上げようと思ったのも、森さんの当作家への情熱が尋常ではないことと、打木村治の描く世界がとても魅力的に感じたからです。晩年の村治と交流があった森さんですが、何よりもその自然へのまなざしが好きといいます。村治が常に追い求めたのは、みずみずしい自然とそこで育まれる人間性でありました。アニメ映画「雲の学校」でも、それは存分に描かれており、舞台となっている比企郡唐子村（現在の東松山市唐子）の自然の美しさ、そこで暮らす人々のたくましさは感動的です。

子どもの騒ぎは雲のさわぐのに似ている

右は、前述の文学碑の碑面に刻まれた一文です。打木村治の言葉は、歌人や俳人のように一語一句に無駄がなく、味わい深いものがあります。

「天の園」の主人公、保（村治の本名）少年は、「景色でお腹のくちくなるような子ども」に育てられようとしていますし、子どもから奪ってはいけないのは、「美しい自然・程よい貧乏・おふくろの愛情」であると村治は言っています。

さて、森さんが打木村治に傾倒する理由ですが、森さんご自身が自然を愛する方であることがお話をお伺いして、よくわかりました。森さんは、税理士である一方、文学と鮎釣りの愛好家です。時間さえあれば川へと出かけていく森さんですから、自然の尊さ、子どもが自然と触れることの大切さを綴った文学者の生き方に共感するところがあるのだろうと推測します。打木村治は、自然を愛し、散歩を好んでいたといいます。そして、飯能は首都圏のダイヤモンドだと、過分なほど飯能の自然を賞美していたそうです。

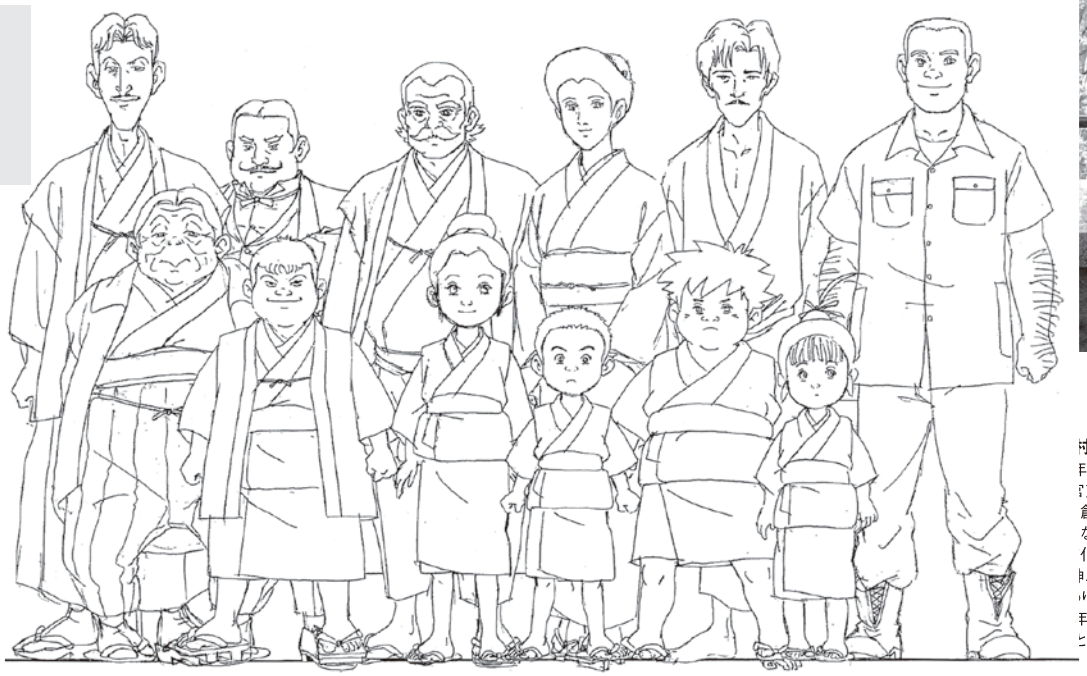
ところが、森さんいわく、ここ数年で飯能の川では鮎が釣れなくなったそうです。川の汚染、生態系の変化など、いろんな理由があるらしいのですが、村治が愛した自然が少しずつ壊されつつあることは、否定できない事実。森さんは、仕方なしに（好んで）伊豆へ、新潟へ、信州へと、鮎を求めて遠出するそうです。

私たちのもうひとつの関心事は、打木村治がなぜ晩年を飯能で暮らしたかということ。彼は幼少時代を東松山で過ごしています。戦後、所沢に居を移しますが、60歳を前に飯能での暮らしを選んでいます。そして、この地において芸術選奨文部大臣賞受賞の名作「天の園」が生まれているわけです。「天の園」の舞台でもあり、幼少期を過ごした東松山を「心の風土」とするなら、終の棲家となった飯能は、この詩人にとってどんな場所だったのでしょう。打木村治に出会ったばかりの私たちに知るすべもありませんが、取材をしていてそんなことを思うのでした。

©天の園制作委員会

●「雲の学校」上映会

日　程：平成17年9月18日（日）
時　間：開場10:00（上映10:30～）開場13:00（上映13:30～）
会　場：飯能市市民会館（大ホール）
後　援：飯能市、飯能市教育委員会、飯能青年会議所、飯能商工会議所、飯能信用金庫、飯能読書創作グループ連絡会、飯能ロータリークラブ、飯能ライオンズクラブ他
料　金：一般／前売り1,000円　当日1,300円
子供（3歳―中学生）／前売り500円　当日800円



子ノ権現・打木村治文学碑

村治略歴

年、大阪に生まれる。早稲田大学卒業後、大
官吏となるが、依願退職し、文芸同人誌「作
創刊主宰。長編小説「部落史」が芥川賞
なったのを機に作家生活へ。戦後、飯能に
化人が発行した「飯能文化」に賛同。詩人・
神二郎や歌人・石川信夫らとともに、飯能へ
りを深めていく。飯能に住まいを構えたのは
年。以降没するまでの27年間、「天の園」を
とする数多くの名著を世に送り出す。

特集

南高麗・間野黒指

Manokurozasu

日々の暮らしも、
アートも、給食も、
この土地とつながっている。

地域の場所を指す言葉として、山に近い方を「上」、町寄りの方を「下」と呼ぶことがある。川でいえば、上流と下流ということだと思う。飯能市南高麗地区は、上直竹上分、上直竹下分、下直竹、苅生、上畑、下畑、岩渕に分かれており、名前を見るだけで、おおよその位置関係が想像できてしまう。今回訪れたのは、その南高麗地区の中で最も山に近い上直竹上分の間野黒指（まのくろざす）という集落。西武線飯能駅から国際興業バスで30分ちょっとかかる。

飯能発間野黒指行きのバスが満員になったのは、運行以来はじめてのことらしい。

南高麗地区は南側に開けた明るい丘陵地域でほとんどであるが、間野黒指あたりまで上がってくると、谷が深くなり山里の趣が濃くなる。30戸ほどの集落では、どの家も田畑を耕し、丹精込めてつくった作物を日々の食卓に載せている。

5月初旬、この間野黒指において「散歩マーケット」というイベントが催された。ここに住む方たちの手作りイベントで、木工品や器、粉石鹸、うこっけいの卵、竹炭、カレー、中華ちまき、ケーキ、マーマレード、たらし餅、わらび、やまうど、竹の子など、工夫を凝らした品々を民家の軒先に並べ、販売するというものだ。参加者は、春の山里を歩きながら途中の家々でひと休みできる。イベントでガイドをしていたのが、間野黒指からさらに奥に入った集落の細田に住む早瀬成憲さん。この地に越してこられたのは28年前。代々ここに暮らしてきた人たちとの交流を深めてきた。

「ここらの人はまじめな人が多い。働いてばかりで遊ぶことを知らない。最近はほとんどの人が町の方へ働きに出ているから、暮らしそのものは厳しいことはないのだろうけれど、暇があると、畑を耕したり、山で収穫したり、家を繕ったり、何かしらやっている。みんなマメだよね。」がここで暮らしての感想。土地を利用することでしか、糧を得ることできなかった山里の暮らし。その習慣は、今も受け継がれているといえそうだ。

「でも、お祭り事はうんと盛り上がる。年に何回か集まりがあるんだけど、やりだすとみんな真剣。この『散歩マーケット』だって、誰かが言い出したんだけど、ここまで盛大になるとはね…。」

普段はひっそりと静まり返っている山里だが、この日は人の賑わいが響いていた。第1回の一昨年は言い出しっぺとそれに賛同した3軒のみの参加だったのが、今年は12軒のお宅が店を出すという盛り上がりよう。200人ほどが訪れたそうで、飯能駅発間野黒指行きのバスが満員になったのは、運行以来はじめてのことらしい。自分たちで作り、収穫したものを軒先に並べ、訪れた人をもてなしながら販売するという行為は、無理がなく楽しそうで、実に好ましい雰囲気だった。

楽する暮らしを手放しでよしとはしない生活態度が、ここには見受けられる。

スタート地点の間野黒指バス停に置かれてあったのが、「散歩マーケット」のマップ。いかにも手作りっぽいもので、簡単なコース案内と出店の場所が書かれてある。やまなみ、かみや、なかおね、金柑舎&オーネ、森のパン屋さん、かえるのおやつ…　昔から伝わる屋号であったり、自作のネーミングであったり、お店の名前がどれも楽しい。

その中で、木崎屋と名付けられたお店があった。切り盛りしているのは、この地で16代続いている木崎家の嫁、木崎久美子さんだ。竹の子やわらび、やまうどの葉などの山菜類に加え、紙の袋に入れられた手作り石けんを販売しているのが目に付いた。これは、彼女が代表をつとめる「リパックみなみこま（石けん部）」が製造しているもの。廃油に苛性ソーダと炭酸ソーダを混ぜて水分を飛ばすと、環境への負荷が小さい洗濯用の粉石けんに生まれ変わるという。

「もう14年も前から作っています。間野黒指などの地域では、下水道が整備されてないんですね。家庭排水の泡や汚れがそのまま川に流されてしまうので、見るに見かねてはじめたんです。」

間野黒指には、下水道だけでなく上水道もない。川の源流部分から直接各家庭に水を引いているのだそうだ（年に何度か、各戸の代表が集まってポンプまわりの清掃を行なっている）。その分、自然のあり様は暮らしと密接に結びつ

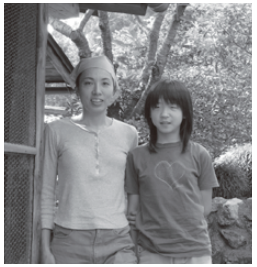
味噌や梅干づくり、山菜の加工などは女の仕事。自ら作った作物を調理し、食べることは、ショッピングよりも楽しそうだ。

イベント用の旗も、洒落た道標も、みんなで協力して作ったお手製。器用な人がたくさん住んでいる。

いているわけで、自分たちが出した汚れが川をダメにしていく現実を目の当たりにし、何とかしなければという気持ちになっていったのだろう。もちろん、この地域の人たちだって、車にも乗るし、携帯電話も使うし、洗濯機をつかって洗濯もする。しかし、楽する暮らしを手放しではよしとはしない生活態度が、ここには見受けられる。

久美子さんのお義父さんは80歳を超えているが、毎日のように畑に出るそうだ。畑は山の上の方にあるから、山道を登っていかなくてはならない。家の大工仕事は何でも自分でやってしまうし、この作業は若い衆でも足元がふらつくそうだが、大きな材木を担いできつい山道を平気で登っていくというのだから、筋金入りだ。

「村のおじいちゃん・おばあちゃんは、多かれ少なかれ誰もがそんなふうに過ごしています。全部マネすることはできませんが、見習うべきことが山ほど。『散歩マーケット』も、そんな昔ながらの山里の暮らしぶりを見てもらいたくてはじめたものなんです。」



奥さんの陽子さんはこの場所で器を作る陶芸家。彼女の作品は、よく肥えた畑の土のようにやさしい。

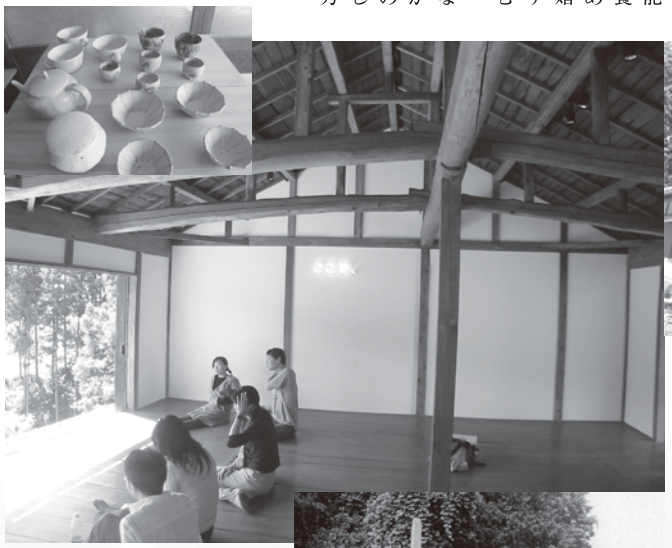
そう語る久美子さんの口調は、誇らしげであった。

食べたり、人と会ったり、子どもと遊んだり・・・僕にとって、ここでの日常は仕事と深くつながっています。

この山里の暮らしぶりと風景に惚れ込んで、芸術活動の拠点にしてしまったアーティストがいる。ギャラリー「オーネ・マノクロザス」のオルガナイザー・捧（ささげ）公志朗さんだ。ここに来る前は、東京都国立に住んでいた。飯能と縁があったのは、市内岩渕にある養鶏所跡をアトリエとしていたからである。この時、出会った陽子さんと結婚することになった彼は、知り合いのすすめで間野黒指に民家を借りて住むようになった。

初めてこの地に来た時、山間の独特なロケーションに驚いたという。飯能駅からそれほど離れているわけではないのに、深い自然が残っている。田舎暮らしだとか、スローライフに興味がある方ではなかったというが、ここにアートの材料をみつけたのかもしれない。

その後、養蚕農家だった古い民家に手を加え、「オーネ・マノクロザス」を開設。現代美術を中心としたアーティストたちを紹介しながら、地域の場においてアートを作り込む活動を展開する。例えば、左の写真は知人でありアーティストである藤原雅哉氏を招いた時のもの。彼はこのような2・3坪ほどの家を制作しながら数ヶ月間ここに



暮らし、地域との関わりを試みたそうだ。

捧さんはいう。

「僕らも、間野黒指に移って来て10年以上。お祭りや自治体の活動にも参加しますし、子どもができてからは、さらに深く交わるようになりました。食べたり、人と会ったり、子どもと遊んだり・・・　僕にとって、ここでの日常は仕事と深くつながっているんです。これからも“ここでしかできない”作品にこだわりたいと思っています。」

「散歩マーケット」では、ネオン管で“ここで”と標した作品を展示。武蔵野の自然が見渡せる民家の2階に白いネオン管が光る情景は、不思議な雰囲気であったが、彼のこうした思いを象徴するかのように怪しく輝いていた。

けっして便利とはいえない山間での暮らし。しかし、ある者にとっては大きな魅力を持つようだ。それが何かは人それぞれであろうが、失われつつある人間の拠りどころのようなものを取り戻そうとする気持ちなのかと思う。私（筆者）は趣味で山に登るが、山に引かれる気持ちにも似ている。飾ることなく地域の暮らしそのものを紹介する「散歩マーケット」というイベント。多くの人が参加し、私を含め当地の魅力を知らさせた。人にとって、自然はやっぱり大きな影響を与えるものなのだ。

学校のすぐ近くの畑で獲れたお茶っぱを利用してつくる「南こま茶むしパン」。

近頃の給食はおいしそうだ。小学校3年になる娘が持ってくる給食の献立表を見るたびにそう思う。季節感もあるし、バラエティに富んでいて飽きさせない工夫がある。和食はもちろん、中華もあるし、エスニックやイタリアンだってあるのだ。ある日の給食の献立は、「なすとトマトのスパゲティ、コーンサラダ、ヨーグルト、ハイジパンに洋ナシジャム、洋ナシジャムに関する一口メモとして、上品な甘さのラ・フランスのジャムです」とある。まるでイタリアン・レストランのランチセットのようではないか。私などは自宅でうどんをすすっていることが多いので、正直いってうらやましい。

そんな献立の中に「南こま茶むしパン」というメニューをみつけた。ネーミングから想像して、地場で収穫したお茶を利用したパンに違いない。興味深く思い、学校に連絡すると、学校給食担当の栄養士、野口栄美さんから話をお伺いする機会を得られた。話を要約するとこうだ。

飯能市内の小学校では、どの学校も同じ内容の統一献立がベースとしてあって、その他にそれぞれの地区の実情に応じて工夫しているそうだ。南高麗小学校の場合、生徒の人数が全校で１２０名程度であることと、調理員の協力が得られることから、できるだけ手作りメニューを提供するようにしている。子どもたちに人気のラーメンは、鶏がら、豚骨、くず野菜、鰹節でだしを取る本格派。化学調味料は一切使っていないという。さらに、地産地消の観点から地場の農作物を採り入れるよう働きかけており、「南こま茶むしパン」は、学校のすぐ近くの農家の協力により実現した一品。知っているおじいさんの畑で獲れたものだと知って、子どもたちはおもしろがって食べる。また、一食あたりの予算が決まっているので、経済ベースに乗るまではいかないようだが、地域の子どもたちが食べる給食の材料として納めていただくことにより、高齢化がすすむ農家にやりがいを提供することにも一役かっている。

当地域では、住民と小学校との関わりは幅広い。学校の脇にある畑や田んぼで生徒たちに米作り・野菜作りの指導をしてくれるのは、南高麗地区の農家の方であるし、旬の時期に納入されるジャガイモは、現在2年生の生徒のおじいさんの畑で採れたものである。努力の甲斐があって、残菜が他の学校にくらべると少ないのが誇り。今後、さらに多くの種類の地場野菜を給食に採り入れていきたいと野口さんは考えている。

上／南高麗小学校の校長先生は、地域との交流に熱心な方だ。右／校庭のアスレチックは、地場産（苅生）の木材を使って修復中だった。